

**公益信託世田谷まちづくりファンド**  
**第18回（平成22年度）助成事業審査講評**

**【 全 体 講 評 】**

〔 運営委員長 土肥真人 〕

本年度より、運営委員長を務めることになりました土肥真人です。どうぞよろしくお願いたします。

私は、5月29日と6月5日に初めて公開審査に臨んだのですが、助成申請された皆さん、見学にこられた市民の皆さんの熱気に、まず圧倒されました。そんな雰囲気の中で、短い時間と限られた情報に基づいて、皆さんの企画への助成の可否、また評価額を決めるわけですが、これにはものすごい緊張感が伴いました。しかし緊張感だけというわけではなく、楽しく喜びの時間でもありました。実際に運営委員を経験してみてわかったことは、評価している私たちはまた、市民の方々に見られ評価されているということです。それではますます緊張が増すのでは、とも思えるのですが、実際には反対でした。お互いに知り合い、聞きあい、学びあうことが出来たときに、一方向の評価する - される関係は、一時的なものとなります。今回申請された全41の企画はその背後に、それぞれのまちという現場をもち、それぞれのお話があって、それぞれのひと時を、公開審査の会場に集い過ごしているのです。それは私など運営委員も同様です。仕分けを仕事としているわけではありません。私の市民としての経験と価値観が皆さんのまちと出会えたときに、不思議と緊張感は消えて、仲間を応援するという感覚になるのでしょうか。それで緊張感の後ろから喜びや楽しさがやってきたのだと、今は考えています。

さて、本年度は昨年度にもまして、たくさんの応募がありました。はじめの一步部門に13件、まちづくり活動部門に23件、ネット文庫制作部門に3件、まちを元気にする拠点づくり部門に2件の応募があり、助成決定はそれぞれ13件、17件、3件、2件（調査費）に対し、助成が決定いたしました。

助成をできない結果になったグループの方々、これは決して皆様の申請が劣っていたということを意味するものではありません。もしかしたら私たち運営委員が判断する能力に欠けていたのかもしれないのです。ぜひ各委員の講評を見ていただき、容れるべき点があれば提案書をブラッシュアップして、再度挑戦いただければと思います。

助成決定されたグループの方々、おめでとうございませす。これからどのようなまちづくりの花が咲き誇ることになるのか、心より楽しみにしております。

また、公開審査を通して、まちづくりファンドの意味についても、考えさせられました。はじめの一步部門の審査をした運営委員会では「この企画はまちと関係あるのか？」という議論が多くなされました。また公開審査に先立って開催された情報交換の運営委員会でも同様の議論が熱く展開されました。結論としてはできるだけ実施してもらおうということにな

りましたが、それはまちづくりファンドへ助成を申請された皆さんはどこかでまちとの関係を考えてくれる、あるいは考え実践せざるを得ないと考えたからです。最終発表会では、皆さんそれぞれの得意の分野での活動がまちづくりとどのように繋がったのか、お聞かせいただけるのを楽しみにしています。またそのときは、皆さんがまちづくりという共通の土台の上で再び会うことになるのではないのでしょうか。まちとは、そのように多様な活動がつながる場所なのだと再確認した次第です。

さて、本年度からは公開審査の方法を大幅に変更しました。一つはポスターセッションを設けて、運営委員が申請されているグループの方々の元へ話を聞きにいったこと、これは同時に申請グループ間や見学にいられている市民の方々の間でさまざまな情報交換や議論が広げられることを期待しての変更でした。私自身は大変よかったのではと、思っています。できれば来年はもう少し時間が取れればいなども思います。

最大の変更点は、助成の可否および助成金額決定のための運営委員による投票システムでした。決定と助成金額を同時に決められるように、各委員が投票カードに妥当だと考える助成金額を記入し、その後は一定のルールに従って自動的に両者が決まるシステムです。これは各委員が自分の考える助成の可否および金額をそれぞれ公開するという、私たちにとっては少々勇気のいる決断でしたが、結果的にひとりの市民としての立場から、申請を検討することをより自由に、そして誠実に、可能にしてくれたと思います。また運営委員一人ひとりには予算総額を考慮せずに、それぞれの企画に妥当だと考える助成金額を記してよい、というルールにしたことも効果的だったと思います。

投票システムの変更にともない、審査講評も、各委員がそれぞれの団体への講評を短く記すことにしました。どうぞそれぞれの委員の投票とそのときの思いを見てください。

本年度は、関係者の皆さんにご相談して、なんとか皆さんのまちを訪れ、皆さんのお話を伺いたいと思っています。その節は、よろしく申し上げます。

最後になりましたが、今回の公開審査会へのご支援、ご協力、ありがとうございました。

## 〔 運営委員 板垣正幸 〕

世田谷区内には、約200の町会・自治会がありますが、その加入率は年々減少し60%を切る状況となっています。しかし町会等は防災や防犯など地域の安全・安心に関わるまちづくり活動に大きな役割を果たしており、また地域の区民同士のつながり役となっております。

一方でNPO法人は増加を続け、現在約400の団体が活動されております。今後もこれらの特定の目的を持った市民活動はなお一層増加すると思われま。

そういう中、今回のまちづくりファンドには多くの応募がありました。改めて世田谷区民のまちづくりへの関心の高さに驚きました。そして応募の理由や活動内容として、町会・自治会との連携や様々な活動団体とのネットワークづくりなどが数多く表明されております。

近年、地域の絆の希薄化が言われておりますが、一方で平成20年度に世田谷区が実施し

た住民力調査では、区民の7割の方が「まちの役に立ちたい」との回答をされております。

今回まちづくりファンドの助成が決まった皆様には、是非地域の様々な団体との連携、ネットワークづくりを進めていただき、まちづくり活動が地域の活性化につながることを期待しています。

### 〔 運営委員 市川 徹 〕

今年は昨年よりも申請団体が増えたこともあり、助成総額が500万円と決まっている中では、運営委員としても大変厳しい審査をせざるを得ない結果となってしまいました。個人的には、今回は、「次につながる活動」という視点に重点を置いて審査をしたつもりですが、全体としては、おおよそそのような傾向でまとまったのではないかと思います。

はじめの一步部門と拠点作り部門（予備選考）はこれからのチャレンジということで、すべて応援しようということになりました。また、まちづくり活動部門2～3年目とネット文庫も、継続の是非を問われましたが、どれもそれまでの活動を踏まえた発展的内容となっており、特に現時点で助成対象外とする理由が見つからないように思いました。こうした結果、助成総額の関係から、まちづくり活動部門1年目の申請に対して、その斬新なアイデアが採用されにくい結果が出てしまったのは私としても残念でした。

しかし、新しい試みがこれだけ生まれていることは、それだけ世田谷のまちづくりの潜在力がまだまだ残っていることを示しており、運営委員としても大変ありがたいことと考えています。助成総額に上限がある中では、優先順位をつけて助成せざるを得ないことから、助成対象外となった団体も決して活動を否定するものではなく、一方で助成された団体も、そのお金の使い道にはぜひ責任を持って活動に望んでほしいと思います。活動をさらに発展させ、改善すべきところは改善し、ぜひ次回もチャレンジしていただければうれしく思います。

### 〔 運営委員 鵜尾雅隆 〕

今回も、数多くの熱気と意欲に溢れ、しっかりとご準備されたプレゼンテーションが続き、審査する側も身が引き締まる思いの公開審査会でした。また、限られた時間の中で、分かりやすいプレゼンテーションをされていた団体が多かったのも印象的です。総額上の制約や支援に確信が持てずに、助成推薦先にできなかった団体もありましたが、その違いは紙一重であったとも言えます。より幅広い参加やひろがりがある活動、成長や発展性を感じる活動、具体的な計画や準備が進んでいる活動をより優先して選定いたしました。

申請内容では、総じて、講師招へいや勉強会を数多く行う申請が多かったように思います。そのこと自体は知見や専門性の向上の観点からも、コミュニティの巻き込みを図るうえでも重要なことですが、その目的や効果の面でも十分な検証が必要だと思えます。

今回は、ポスターセッションや参加者間の交流、応援メッセージなどの新しい企画も加わりましたが、運営委員としても、詳しくお話を聞ける機会もあり、また、見ておきますと、心温まる応援メッセージを貼り出していただいた方も数多くおり、大変うれしく思いました。

また、今回は公開審査会自体の時間短縮も行い、一般区民も参加しやすい環境づくりも目指しましたが、時間的には、30分強時間をオーバーして、かつ審査効率化のために導入した、投票と金額査定を一体とした方法が若干分かりにくかったかもしれません。その他の点も含めて、今回は、公開審査会の運営についてのご意見も張り出していただいていますので、私たちも、一步一步前進して、少しでも多くの区民が参加して、「世田谷がもっと好きになる」公開審査会を実現していきたいと思えます。

### 〔 運営委員 小河原孝生 〕

審査員として3年目になる今年は、はじめの一步部門やまちづくり活動部門の申請が多く、活動の拡がりを実感しています。昨年は、経費の扱いなどについての審査を厳密にするために時間がかかりましたが、今年は経費の記載例も充実し、中身の審査に集中することができました。もとより、応募用紙の提案と本当に短時間のプレゼンだけでは、皆さんの活動を垣間見た程度なのですが、これまでの経験を活かして、審査員としての中立性と、まちづくりの応援団としての狭間で、行間を読むような努力と、活動のヒントになるような質問を心がけているつもりです。いつも審査会を通して、皆さんの元気を分けてもらっていますが、ファンドの応募や助成をきっかけに、まちづくり活動に関わり続けていただけることを願っています。

### 〔 運営委員 小原美穂 〕

みなさんから寄せられた様々なアイデアに圧倒されました。ジャンルも多岐に渡り、また活動に参加されている世代にも幅があって、世田谷区のまちづくりの奥深さを実感しております。

まちづくりの課題として、ヨコのネットワークがなかなか作れないという事があげられていましたが、今回のプレゼンテーションを聞いて、ヨコの連携がはかれそうな可能性を感じるものがいくつかありました。一見、関係ない活動と思えても、情報交換を通じて、ネットワーク構築にも挑戦されてはいかがでしょうか。今すぐ連携できなくても、将来、手を結べる日が来ると思えます。

来年の報告会でみなさんの活動を伺えるのを楽しみにしています。

## 〔 運営委員 影山知明 〕

大きく3つの視点から見させていただきました。

1. 創出しようとしている価値への共感（ニーズの存在や、まちづくりとの整合性など）
2. 1.の価値創出を可能たらしめる能力のユニークさ
3. 経済的な自立への可能性

ほとんどの団体が1.については問題がないものの、2.と3.については少し物足りなさを感じました。もちろんひとつひとつの活動はそれ自体において尊く、その成果は間違いなくプラスのものであろうと思うのですが、同じ50万円を投じると考えたとき、もっとうまく成果に結び付けてくれるところがありそうな気がする、と感じてしまうのです。

中でも不足感を感じたことが2点あります。

ひとつは、課題を構造化する力。つまり活動の成果をイメージしたとき、そこに到達するために、どこにどう力をかけていくことが効果的・効率的なのかを構想する力の不足。

もうひとつは、プロデュース力。つまり、ものをつくったり、場を運営したりすることへの意識は高いものの、それをどう広く認知させ、興味を持たせ、広がりをつくっていくかという観点についての意識の不足です。

両者をあわせて「成果志向」の不足と言ってもいいと思います。

世田谷まちづくりファンドの財源が無尽蔵であるならば別ですが、そうではないとすると、上記で触れたような「成果/助成額」への意識をより強く持たないことには、このファンドの存在意義自体、問われることになりかねないと思います。

特に自分自身、世田谷区民でもあるだけに、そう感じました。

## 〔 運営委員 佐谷和江 〕

公開審査会は5時間超の長丁場で、皆さん大変お疲れさまでした。

ご存知のように、まちづくり活動部門は最長3年間、助成が受けられます。今回は2年目、3年目の申請団体はすべて助成対象となりましたが、1年目の団体の中で助成を受けられない団体がいくつかありました。

1年目の団体は実績というか、試行が表現されていないところが多かったと思います。私はiPhoneを使っていますが、そのアプリケーションには「ベータ版」という完成品ではなく試用段階だけれども、多くの人に使ってもらって、いいところや不具合を発見し、よりよい製品・サービスにしていくというものがたくさんあります。

まちづくりでもお金をかけずに「ベータ版」段階でやってみて、その結果をふまえて申請してくれるといいのになあ、と感じました。

1年目の団体に限らず、まちづくりのいろいろな活動は、永遠に「ベータ版」ではないかと思っています。いいところや不具合を発見して、継続的によりよいものにしていく必要があるか

らです。ちなみに、今回も審査方法は昨年と変わっていました。18回も審査をしてきても、固定化しないものだし、しない方がいいのだろうと思っています。

### 〔 運営委員 首藤万千子 〕

最近、世田谷の市民活動がいろんなところでつながりあい、情報交換をしながら活発になっているような実感がありましたが、それを裏付けるような応募件数の多さだったのではないかと思います。ファン卒業生としてはお仲間の皆さんの取り組みはとても興味深く、学ぶことがたくさんあります。また市民の力で世田谷区の住み心地がどんどん良くなっていくようでとても嬉しいです。

そこに住み続ける住民の意思や志向はまちづくりにとって何よりも大切でしょう。たとえ小さな取り組みでも、ニーズがわかっている市民の活動は問題解決に向けて確実に前進できます。来年の報告会で皆さんの活動の成果を教えてください。ことを本当に楽しみにしています。

### 〔 運営委員 福永順彦 〕

委員長という立場ではないので、講評というよりも、少しだけ気楽に個人の感想を述べさせていただきます。

あらかじめ考えていた自分なりの審査基準も、いざ実際の団体を前にすると迷いが生じ、思っていた以上に難しい「審査」でした。

まちづくりを広義にとらえると、すべての活動はまちづくりにつながっているとあらためて感じました。どの活動にも、どこかに、おっ？と思わせる部分があり、自分のまちで何かを始めようとする、その意気に対して応援をしたいという気持ちが生まれました。「なんとなく切りにくい」というよりも「切りたくない」という気持ちが強かったのです。これが、今回審査する立場になって気づいたことで、自分でも意外でした。

いろいろな団体と出会うことで、これから先、自分がどう変わっていくのか、そのことも楽しみになってきました。まちづくりファンは、参加団体、運営委員、事務局、サポーターなど本当に皆でつくりあげていく場なんだということを実感した1日でした。

以 上